

生命が共有し得る価値とは何か ラスキンの固有価値論を基礎として

橘高彫斗*

1. 研究の背景と目的

「固有価値」は、ジョン・ラスキン⁽¹⁾が功利主義や古典派経済学における価値概念を補完もしくは代替するものとして提唱した価値概念であり、自然や芸術文化に内在する「美の観念」としての「生を支える絶対的な力」とであるとされる。つまり、固有価値の内在する自然を維持し、その美を芸術文化すなわちアートとして積極的に創造することで、本質的な「富」が増殖すると考える点が、ラスキンの価値概念の特徴である。

本報告は、固有価値概念の持つこうした特徴に着目し、現在なお異なる政治経済体制の併存する東アジアにおいて、それが人と生命が共有し得る価値としての可能性を持つことを、イマヌエル・カントおよびチャールズ・サンダース・パースの思想に依拠しながら検証を試みる論考である。構成として、まず東アジアにおける二つの政治経済体制を取り上げ、それらの「制度」を基礎付ける価値概念の限界とラスキンの固有価値概念の持つ可能性を確認する。次に、固有価値概念の具体的な内容について、既往研究やカントの価値思想に依拠しながら検討する。さらに、大気汚染という具体的な課題に焦点を当てながら、人と生命が共有し得る価値とは何かについてパースの記号

* 大阪大学・人間科学研究科 DC

論を用いながら検討し、結論を導くこととする。

2. 自由民主主義体制は普遍的か

ヘーゲル哲学を自らの歴史理論構築へ巧みに応用したフランシス・フクヤマは、歴史をイデオロギーの弁証法であると見なし、ソ連崩壊を経て人類は自由民主主義こそが普遍的体制であることを見出したと示唆している。その上で歴史は、まさに最終局面に到達しているとの認識を示している [Fukuyama, 1989]⁽²⁾。しかし世界には現在なお、社会主義体制を維持する国家が、近隣の自由民主主義体制の国家に対峙する形で併存している(図1)。東アジアの島弧の国に生きる者として、筆者がこの観点からすぐさま思い至るのは、体制を異にする対岸の大陸国家との間に生じている越境的な汚染の問題についてである。例えば、近年注目されている粒子状大気汚染物質のPM2.5は、肺胞への沈着による健康被害のリスクが大きく、また酸性雨の原因とも考えられているが、こうした大気を媒体とする汚染は、国境や体制の違いを容易に越えて隣国へ拡散する(図2)。

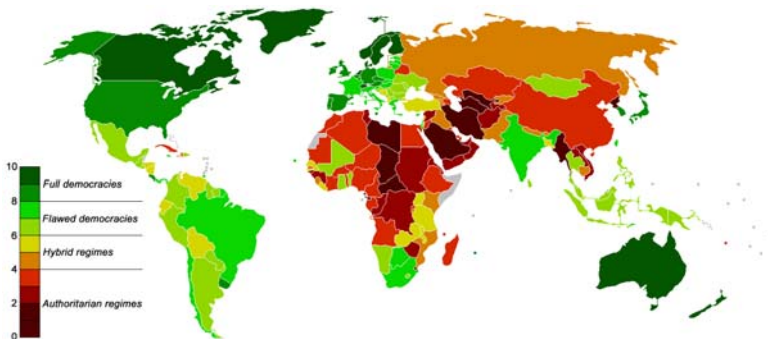


図1. Democracy Index 2010(Economist Intelligence Unit)

(緑色の地域ほど民主主義の度合いが高い)

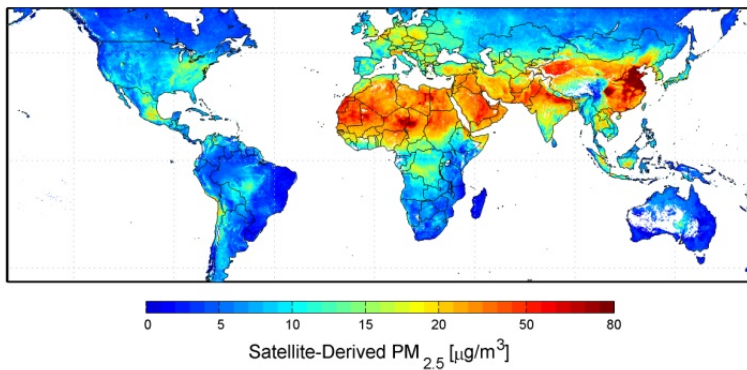


図 2. PM_{2.5} 濃度の分布(2001 ~ 2007, NASA)

大陸を取り囲む「リムランド」と内陸の「ハートランド」が明瞭に対峙する東アジアにおいて、フクヤマの言う「イデオロギーの弁証法」は未だ最終段階に至っておらず、これが汚染対策の違いとして現れているとも考えられる。自由民主主義体制と社会主義体制の相違点は、やはり各々において主流派とされる経済学、すなわち新古典派とマルクス派の違いに依拠するのであり、それはまた、経済行動を理論化する上での「制度」観の違いに起因することは確かだろう。つまり、個人の効用最大化を消費行動の原理と見なすような制度と、行動すなわち労働の生み出す価値の分配を中央政府が管理するような制度との違いである。世界の趨勢として、後者より前者がより多く望まれているというのがフクヤマの主張である。

しかし筆者はここで、このフクヤマの主張を甘受し、社会主義体制に対する自由民主主義体制の優位性を擁護したい訳ではない。どのような「制度」が汚染への対処に適合的であるかという観点で見れば、いずれにおいても制度そのものの理論的な改良によって、汚染の把握と削減のメカニズムが既に同程度には組み込まれているはずである。それにもかかわらず汚染をコントロールできない状況が現れるということは、問題はより根本的なもの、

つまり制度を基礎付けている価値概念に関わるものと考えられるのである。この点については、従来、新制度派経済学の立場からの批判がある。例えばハーバート・サイモンは、新古典派で想定されている効用の合理的認識が、現実には不完全で限定されたもの、すなわち「限定合理性」であると指摘している [Simon, 1947]

効用概念における合理性に関する批判は、確かに制度を見直す上で重要な視点を与えるが、効用価値説がはらむ問題というのはそうした点よりも、むしろマルクス派における労働価値説とは対照的に、価値というものを消費が引き起こす主観的で相対的な個人の感性ととらえ、財を単に観念論的な対象として扱う点にあると筆者は考える。他方、労働価値説にも問題と言える側面があり、それは価値というものを労働とそれが生み出す財に帰属する絶対的なものととらえながらも、効用価値説におけるような価値の受容から引き起こされる個人の感性や生の喜びといったものが全く考慮されていない点にある。

こうした互いに対照的な特徴を有する両価値概念から筆者が想起するのは、功利主義的な効用価値説と古典派経済学における労働価値説を補完もしくは代替する価値概念としてジョン・ラスキンが提唱した「固有価値」の概念である。これは、現代の視点から見ると、新古典派とマルクス派の特徴を合わせ持つ第三の価値概念の方向性を示すものであり、さらには人間のみならず生物すべてが共有し得るエコロジー思想的な可能性も秘めた価値概念であると筆者は理解している。かつて、ラスキンの著書『この最後の者にも』に触発されたマハトマ・ガンディーは、イギリスによるインドの支配に対してアヒンサー（非暴力）による抵抗を行ない、またヒन्दゥー教徒とイスラム教徒との融合も目指すなど、アジアにおける様々な対立を超えようと模索したのであるが、その根底には、いわば本論が想定する思想の先駆とも言える、固有価値概念に基づく生命平等の思想があったことを付言しておきたい。

3 . 効用と労働をつなぐ固有価値概念

固有価値概念に関しては、その認識における人間の美的反応が美の観念を受容する心的プロセスとされている点や、このプロセスを指す「テオリア」ないし「構想的能力」という言葉がアリストテレスからの引用であり、さらにキリスト教社会に適用可能なものと見なされている点などが指摘されている [Hewison, 1976, Carroll, 1995]。また、固有価値が美学的、精神的、社会的、歴史的、象徴的、本物としての価値といった特徴を有する文化的価値の概念に包摂されながらも、功利主義を起源とする相対主義的な経済的価値とは異質な概念であること、固有価値が内在する芸術を創造する労働はそれ自体が労働者にとっての効用であり、効用自体も教育により変容し得るなどの指摘もある [Throsby, 2001, Holden, 2004, Hewison and Holden, 2004, 池上, 2000, 寺西, 2000 など]

固有価値を文化的価値に包摂し、経済的価値と対比させる見解は文化経済学に特有の観点であるが、両価値概念の違いは、こうした文化的視点でのみ説明されるものではないと筆者は認識している。固有価値が経済的価値と異なるのは、それが財そのものに備わる属性とされるのに対して、経済的価値すなわち効用は財の消費によって得られる主観的な感性とされる点にある。これは言い換えるならば、固有価値においては価値の内在する財が実在的なものと見なされ、他方、経済的価値では財が単に観念論的な対象と見なされているということである。価値が実在的であるということは、すなわち価値を絶対的で不変的なものと想定し得ること、それ故に既存のイデオロギーの違いを超えて、多くの人により、あるいは人間のみならず生物すべてを含めて、その価値が共有される可能性が開かれているということである。

こうした価値は一言で表すならば、池上 [2000] が指摘するように、人の生に喜びを与える「アメニティ」であると言えるだろう。具体的には、生活の中に導入された芸術や、生活を取り巻く大気、土地などの自然環境を指す。そして、これらの固有価値が工芸品や日用品などの消費財に移転することで市場取引の対象となり、功利主義的な効用と関係を持つに至る。同時に、固

有価値を財に移転させる芸術的な創造行為は、それ自体が生への喜びとしての効用を伴う労働であり、ここに効用と労働が結び付くのである。こうして地上に蓄積される「本質的に価値のある物」こそが「富」であり、ラスキンは『芸術経済論』においてそれをまさに「蓄積」(accumulation)と表現したのである。Throsby[2011]は、この蓄積の概念を現代の経済学における資本(capital)に相当するものと解釈し、それが過去世代から現在世代に譲り渡された文化的資産であり、現在世代はその保全に尽くすことを要請されると指摘している。ここで、ラスキン自身の言葉により、『ムネラ・ブルウェリス』において示された固有価値の定義を見ておこう。

固有価値とは、任意の物の持つ、生を支える絶対的な力である。一定の品質・重量の一束の小麦は、その中に人体の実質を保持する一つの計量可能な力を持ち、一立方フィートの清浄な空気は、人間の体温を保持する一つの固定した力を、また一定の美しさの一群の草花は、五感および心情を鼓舞し活気付ける一つの固定した力を持っている。人々が小麦なり空気なり草花なりを拒もうと軽蔑しようとする、それはこれらのものの固有価値に少しも影響するものではない。使用されるかどうかに関わりなく、それら自身の力がその内に存して、この独自の力は他のどんなものの中にも存しはしない。[Ruskin, 1872=1958]

富に内在するこうした固有価値は、しかし人間の側にそれを受け入れる健全な状態、すなわち「受容能力」が準備されていなければ価値としての実効性を持たないとラスキンは述べている。受容能力は固有価値を顕在化させる、いわば認識のフィルターのような機能を持つのであるが、これは Hewison [1976] の指摘にある心的プロセスであると同時に、ラスキンが提示するところの「モラル的網膜」とも言える [Ruskin, 1846=2003] 筆者はこれを、ある種の透過膜と見なしてモデル化し「受容膜」と呼んでいる。それはつまり、池上 [2000] が指摘するように、消費者の欲求を教育によって芸術的な選択能力にまで高めることを想定した効用であり、需要が将来的に変化し得るといふ論拠を市場に持ち込むことになる。ラスキンは『この最後の者にも』において、「通常の経済学者は需要という言葉で『売られたもの

の数量』を意味しているが、私はそれで『買手の買おうとする有効な志向の強さ』を意味するのである」と述べている [Ruskin, 1860=2008]。この「有効な志向の強さ」こそは、効用が心理的関数に依存することから生じる需要の自由度であり、ここに受容能力の介入する余地があると考えられる。こうして、「固有価値と受容能力が相伴う場合には、『実効的』価値、つまり富が存する」とされるのである。

このように見てくると、効用価値説と労働価値説は、価値概念の本来の領域、すなわちカントが言うところの「自然法則」の無目的性と「道徳法則」の目的性が重なり合う中間的な「自然目的」の領域からは、やや逸脱していることがうかがわれる [Kant, 1790=1964]。『判断力批判』でカントが述べているように、価値の認識においては、自然における生命システムの「有機的存在者」や芸術文化の美的「対象」など、あたかもそれら自体が目的性にしたがっているかのように見なされ得る「合目的性」のもたらす快不快や美的妥当性、生命システムの特異性や全体性といった目的論的格律が価値判断の根拠とされる。カントは、「自然美を形式的（単なる主観的）合目的性の概念の現示と見なし、また自然目的を実在的（客観的）合目的性の概念の現示と見なしてよい」としている [Kant, 1790=1964]。

こうしたことから、効用価値説と労働価値説における価値判断は、むしろそれと重なり合う領域としての自然法則的な認識と道徳法則的な立法という二つの方向性を極端に強調した姿だと言えそうである。カントによれば、「ある」か「ない」かの存在論的な命題は常にアンチノミーを生じる危険性をはらんでいるが、これは存在が確定できないのではなく、存在を対象とする認識が主観的であることによるとされる。主観とは、感性の形式による直観であり、対象はこの主観にしたがう形でのみ現象する。つまり、認識できるのは現象(センステータ)であって物自体は認識できない。効用価値説は、まさにこの感性的な主観を根拠とする価値概念であり、財は単なる観念論的な対象としてのみ現象するのである。他方、労働価値説における労働とそれが生み出す財は、何らかの前提が「ある」ならば「すべし」というような対象を手段とする条件付きの仮言命法ではなく、前提なしに「すべし」と言い

切るような対象そのものを目的とする定言命法によって根拠付けられた、超感性すなわち理性により認識される絶対的な目的としての価値概念であることは明らかである。

以上に対してラスキンの固有価値概念は、「生を支える」という前提が示すように、生命システムや美的対象の持つ合目的性を根拠とするカント的な本来の価値概念の領域に合致するものと言えるだろう。しかし他方で、それが「絶対的な力」とされている点は、カントにおける価値概念と決定的に異なる点である。

4．生命が共有し得る価値としての大気

ここで大気汚染というものを、カント的な価値判断の対象としてとらえてみることにしよう。汚染された大気は、多くの人にとって心理的な不快感を抱かせる対象であることは確かであり、したがって汚染と不快との関係は、いずれ心理的法則ないし生理的法則として普遍的に妥当するものと見なされるだろう。そこに残されているのは最早カントの言う価値判断ではなく、効用価値説と同様の観念論的な自然法則の認識であると言える。つまり、汚染は単なる不快の対象としてのみ認識され、汚染を避けることはあっても積極的に削減する動機は生じない。他方、大気汚染という現象が、前提なしに肯定もしくは否定される定言命法の形によって、絶対的な目的と見なされる場合があるかも知れない。これを労働価値説の立場から考えると、仮に大気が労働によって生み出される財であるならば、汚染と労働とのつながりも見出され、ある種の道徳法則が立法される可能性はあるだろう。しかし実際には、大気が自然現象である以上、そうしたことは起こらない。

このように、カントの立場から価値判断をとらえて行くと、いずれは自然法則的な効用価値説か道徳法則的な労働価値説のどちらかに偏った認識に至る。これは、カントにおける価値判断があくまでも観念論的な対象についてのものであり、価値とは何かという価値そのものの絶対的な実在性、すなわちパースが言うところの「一般性」が明らかでないことによると考えられ

る [Peirce, 1968=1980] この場合の一般性とは、合目的性を単なる価値判断の根拠と見なすことなく、生命自身にとって現実の目的となすような確定的な実在性である。パースの実在論的な認識論においては、対象が自然法則であれ道徳法則であれ、あるいは価値であれ、その推論過程が「科学的論理」であるならば、対象の実在性を認識できるとされる。パースは、カント的な自己と対象のみの関係性を「二項関係」と呼び、これに一般性の項を加えた関係性を「三項関係」と呼んだ [Peirce, 1935=1985] 三項関係を経ることにより、合目的性という仮説的な前提が一般性を有すると人々に認められれば、最早それは価値判断の根拠ではなく、価値的な実在を認識する記号過程そのものと見なして差支えなくなる。

パースによれば、実在は人間の認識に関わりなく、それが「在る通りに在る」のであるが、それ故にまた人間の意識現象に外部から強制的に作用し、認識を修正する。「記号の一つ一つがその後に来るものを表意するというふうが続くような記号過程の限りない連鎖は、その極限に絶対的对象を有するものと考えてよいであろう」とパースは述べている [Peirce, 1935=1985] 実在は、その真の在り方に関する様々な意見の対象であり、共同社会において最終的に意見の一致をもたらすものである。パースは次のように述べている。

実在の事実が存在する、そしてそれらの実在の性質はそれらについてのわれわれの見解には全く依存しない。それらの実在の事実は規則正しい法則にしたがってわれわれの感覚に作用する。われわれの感覚はわれわれと対象の関係に応じて異なるけれども、しかしわれわれは知覚の法則を利用して、事物の真実の在り方を合理的思惟によって確かめることができる。そしてどんな人間でも、かれが実在について十分経験を有し、それについて十分熟慮するならば、一つの真なる結論に到達するであろう。 [Peirce, 1935=1980]

他の生物も同様にこうした記号過程を有しているかどうかは定かでないが、生物の生存がまさに合目的的であることから類推して、同様の記号過程により自らの「生を支える絶対的な力」、すなわち固有価値を受容していると見なすことはできるだろう。大気とは、あらゆる生命がその種に固有のプロセスを経て自ら作り出す生存基盤、すなわち「環世界」であり⁽³⁾、それこそが生命が共有し得る価値であると言える。しかし、マックス・シェーラー

も指摘しているように、人間は他の生物と異なり、環世界に埋没した状態から解放され、環世界自体を再帰的に認識しており [Scheler, 1949=2012], さらにそれを相対化したアートとして二次的な環世界を創造していると考えられる。固有価値が自然と共に芸術文化にも内在するとされる所以である。

したがって、人間にとっての大気は、他の生物と共有する環世界としての価値的な実在であると共に、その環世界における人間と大気の適合的な関係性をもたらす美の観念であると言える。ラスキンは『近代画家論』第2巻で、自然の美のタイプとして、無限性、統合性、休らい、左右対称性、純粹性、節度の6種類を挙げているが、これらはそのまま人間の受容能力すなわちテオリアの質に依存する [Ruskin, 1846=2003]。つまり大気汚染とは、自然における美のタイプの持つ安定性の崩れであると同時に、それが人間自身のモラル的な受容能力の低下や「墮落」に直接結びついた現象なのである。『フォルス・クラヴィゲラ』の1871年5月号において、ラスキンは以下のように述べている。

空気は、あなた方の生き方や死に方に依りて、いくらでも汚染させることができる。あなた方全員を破滅に追い込むような悪疫をこの地上にもたすことすら、あなた方にとっては容易いのである。……他方で、腐敗した物質を適切にかつ迅速に処理し、有害な工業生産を絶対的に禁止し、地上と大気を浄化し、それらに活力を与えるような木々をあらゆる土地に植えることで、汚染された空気を基に戻す力をもあなた方は文字通り無限に持っているのである。 [Ruskin, 1871]

こうした、生物の環世界と人間特有の二次的な環世界とのつながりについて、筆者はここで、以下のような生物の光エネルギー受容機構に関わる記号過程の発展史として説明を試みることにする。今から約25億年前の先カンブリア時代、始生代から原生代への移行期に、シアノバクテリアやミトコンドリアなど原核生物の一部が共生し、真核生物が誕生した。すなわち、存在そのものとしての自己言及的な一項目関係から、自己と対象の二項目関係への移行である。これにより、一つの細胞内でクロロフィルaによる光合成やロドプシンによるATP合成など光エネルギーの利用形態が定まり、いわばパッケージとしての生存方法の選好と志向性が獲得されたと言える。

次に、約5億年前の古生代、カンブリア紀となり、「眼」が発生する。網膜中のロドプシンなど受容器による光エネルギーの受容を経て、知覚記号の解釈、解釈に基づいた作動器による視覚世界の環世界化といった「機能環」が獲得される（図3右）⁽⁴⁾。光エネルギーの化身としての食物と自己との関係性を、一般的連続的な視覚世界の中で確定的に解釈する三項関係の出現である。走光性や識別能力など、解釈の確定に確率的な過程が含まれる。

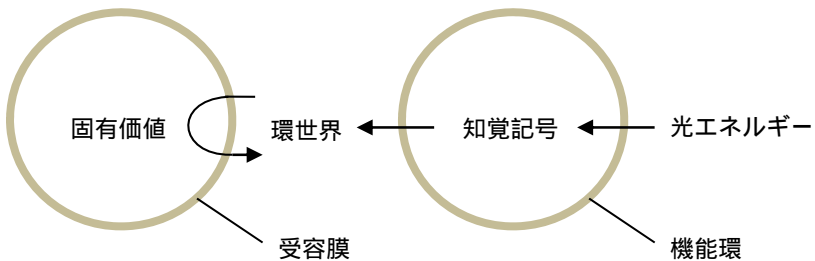


図3. 受容膜モデル（左）と機能環（右）

そして約4万年前、新生代第四紀、更新世後期となり、受容能力の心的プロセスである「受容膜」が発生する。これは、それまで視覚的な環世界に没入していたホモサピエンスが、環世界そのものを対象化することによりそこから解放され、自己と他の生物を含めた環世界のネットワークを超越的に俯瞰する新たな視覚を獲得したものと言える。これにより、洞窟壁画など芸術文化的な創造行為が始まった。環世界そのものの合目的な固有価値を受容し、さらにアートとして二次的な環世界を創造する、人間特有のメタ三項関係の出現である（図3左）。

5 . 結論

本論では、ジョン・ラスキンが功利主義や古典派経済学における価値概念

を補完もしくは代替するものとして提唱した固有価値の概念に着目し、それが、現在なお異なる政治経済体制の併存する東アジアにおいて人と生命が共有し得る価値としての可能性を持つことを、イマヌエル・カントおよびチャールズ・サンダース・パースの思想に依拠しながら検討した。

以上の考察から、人間を含めた生物は、価値の一般性を考慮する三項関係的な記号過程により価値的実在としての環世界、すなわち固有価値を認識しており、さらに人間はその環世界自体を対象化し、アートとして二次的な環世界を創造しているという記号論的な解釈が可能であることを確認した。こうした解釈により、固有価値概念を基礎とする、生命が共有し得る価値の可能性を示すことができた。

注

- (1) ジョン・ラスキン（1819～1900）はイギリスのヴィクトリア時代に活躍した美術評論家、思想家であり、『近代画家論』でターナー作品の評論を開始した後、『この最後の者にも』や『ムネラ・プルウエリス』などを通じて経済社会批評にも力を注いだ。
- (2) フクヤマの議論に対しては、冷戦後も文明の衝突による対立が生ずるとするサミュエル・P・ハンチントンによる反論 [Huntington, 1996]、さらにハンチントンに対する、歴史と対立の起源は家族制度の違いにあるとするエマニュエル・トッドによる再反論がある [Todd, 1990 など]。また、かつてH・J・マッキンダーは、デモクラシーが世界へ拡大する上では大陸の「心臓地帯」(ハートランド)の覇権をめぐって海洋国家のシーパワーと大陸国家のランドパワーが対立すると述べており、ソ連成立後の歴史を予想していたと言える [Mackinder, 1919]。
- (3) 環世界はヤーコプ・フォン・ユクスキュルにより提唱された生物主体の記号過程が作り出す知覚世界のことであり、生態学的ニッチに近い概念である [Uexküll, 1934=2008]。
- (4) 機能環は生物主体が環世界を生成するプロセスであり、前出のユクスキュルにより定義された [Uexküll, 1934=2008]。

参考文献

Carroll, D., "Pollution Defilement and the Art of Decomposition", *Ruskin and Environment The Storm-Cloud of the Nineteenth Century*, ed. by Wheeler, M.,

- Manchester University Press, 1995.
- Fukuyama, F., “The End of History?”, *The National Interest*, Summer, 1989.
- Hewison, R., *John Ruskin the argument of the eye*, Princeton University Press, 1976.
- Hewison, R., “No Wealth but Life: Ruskin and Cultural Value”, *Mikimoto Memorial Ruskin Lecture*, 18 November, 2010.
- Hewison, R. and J. Holden, *Challenge and Change: The Heritage Lottery Fund and Cultural Value*, London: Demos, 2004.
- Holden, J., *Capturing Cultural Value: How Culture Has Become a Tool of Government Policy*, London: Demos, 2004.
- Huntington, S. P., *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*, Simon & Schuster, 1996.
- Kant, I., *Kritik der Urteilskraft*, 1790 [1914] . (篠田英雄訳 『判断力批判』岩波書店, 1964 年.)
- Mackinder, H. J., *Democratic Ideals and Reality: A Study in the Politics of Reconstruction*, Constable, 1919. (曾村保信訳 『マッキンダーの地政学 デモクラシーの理想と現実』原書房, 2008 年.)
- Peirce, C. S., *Collected Papers of Charles Sanders Peirce, Vol.1*, ed. by Charles Hartshorne and Paul Weiss, Harvard University, 1935. (米盛裕二訳 『パース著作集 1 現象学』勁草書房, 1985.)
- Peirce, C. S., *Collected Papers of Charles Sanders Peirce, Vol.5*, ed. by Charles Hartshorne and Paul Weiss, Harvard University, 1935. (上山春平訳 「探求の方法」上山春平編 『パース・ジェイムズ・デューイ』世界の名著 59, 中央公論社, 1980 年.)
- Peirce, C. S., “Some Consequences of Four Incapacities”, *Journal of Speculative Philosophy*, 1868. (山下正男訳 「人間記号論の試み」上山春平編 『パース・ジェイムズ・デューイ』世界の名著 59, 中央公論社, 1980 年.)
- Ruskin, J., *Fors Clavigera: Letter to the Workman and Labourers of Great Britain Vol. 1*, John Wiley & Sons, May 1871 [1886] .
- Ruskin, J., *Modern Painters Vol. 1*, Smith, Elder and Co., 1864. (内藤史朗訳 『構想力の芸術思想(近代画家論・原理編 1)』法蔵館, 2003 年.)
- Ruskin, J., *Munera Pulveris: Six Essays on the Elements of Political Economy*, J. Wiley, 1872. (木村正身訳 『ムネラ・ブルウェリス』関書院, 1958 年.)
- Ruskin, J., *Unto This Last: Four Essays on the First Principles of Political Economy*, Cornhill Magazine, 1860. (飯塚一郎他訳 『この最後の者にも、ごまとゆり』中央公論新社, 2008.)
- Scheler, M., *Die Stellung des Menschen im Kosmos*, München: Nymphenburger

- Verlagshandlung, 1949[1928]. (亀井裕, 山本達訳 『宇宙における人間の地位』 白水社, 2012 年.)
- Simon, H. A., *Administrative Behavior*, The Macmillan Company, 1947.
- Throsby, D., *Economic and Culture*, Cambridge: Cambridge University Press, 2001.
(中谷武雄, 後藤和子監訳 『文化経済学入門』 日本経済新聞社, 2002 年.)
- Throsby, D., “*The Political Economy of Art: Ruskin and Contemporary Cultural Economics*”, *History of Political Economy*, Vol.43, No.2, 2011.
- Todd, E., *L'Invention de l'Europe*, Seuil, coll. L'Histoire immédiate, Paris, 1990. (石崎晴己, 東松秀雄訳 『新ヨーロッパ大全』 藤原書店, 1992 年.)
- 池上淳「アメニティの経済学」環境経済・政策学会編『アメニティと歴史・自然遺産』東洋経済新報社, 2000 年, 49-59 ページ.
- 寺西俊一「アメニティ保全と経済思想」環境経済・政策学会編『アメニティと歴史・自然遺産』東洋経済新報社, 2000 年, 60-75 ページ.